

Web とブログを用いた遠隔教育

——再履修クラス開講について——

中田美喜子*

(2007年10月17日 受理)

Distance Learning on the Web Using Blogs

—— Concerning Opening of Re-study Classes ——

Mikiko NAKATA

Abstract

We have started a class for restudy program on the Web using blogs by distance learning (teleteaching) at our university. Four exercises were presented in the program and academic credits were granted by passing the test. Student opinions on the teleteaching were surveyed by questionnaires distributed in the end of the program. The results of this questionnaire and analysis on the effect of the learning are reported herein.

Participating students apparently experienced little resistance with the teleteaching method as many positive opinions were expressed in the questionnaire. Eighty-two percent of the participating students in the restudy program were able to secure their academic credits; those who had submitted their responses to over 70% of the exercises were given the academic credits. These results in themselves lead us to think that the teleteaching approach for a restudy class requiring individual guide was effective. We expect that teleteaching will enable us to give improved support to our student body.

はじめに

1年生の必修科目の単位を取得できず、再履修クラスが別途開講されていない場合、通常2、3年生では時間割の都合で1年生の講義をなかなか受講できない場合が多い。つまりは、1年生で必須科目を取得しないと、受講に大変不利となり、受講のために多大な労力が必要となってくると推測される。そのため、4年生まで単位の取得を引き伸ばしてしまう学生も少な

* 生活科学部，生活デザイン・情報学科

nakata@gaines.hju.ac.jp

くない。

現在の大学教育では、学生サービスの向上のためにもこのような不利益を解消すべくカリキュラムや時間割や開講クラスなどを工夫することが必要である。そこで、本学では1年生必修科目である情報リテラシ関連科目である「CP コミュニケーション I」の再履修において、遠隔講義による開講で、時間割などによる不利益を解消し、再履修を希望している学生がすべて受講できる開講方式を試みた。

遠隔講義には大きく分けて、講義を開講しているときにその講義を遠隔地で受講する、同期型遠隔講義（永田他，2004）と、学生の都合のよい時間に講義ビデオや説明などを受講する、非同期型遠隔講義（オンデマンド）（中田他，2005）の2方式があげられる。同期型遠隔講義の場合は、同時に開講して講義の画像と音声および各種データをインターネットなど用いて送受信する方式である。この場合は、開講場所が異なっており、遠隔地にあることによる遠隔同時開講であるといえる。この場合のメリットは、キャンパスが遠い場合でも2こま開講することなく、1こまの開講で異なったキャンパス間で受講が可能である。通常の講義をビデオ画面などで学習していることに比較して、その場で質問できるなど双方向で対面の同時開講である。

一方、遠隔講義を非同期型で実施する場合には、本人のアクセスが出席回数と同様の扱いとなるであろう。学生が都合のよい時間に都合のよい場所（大学、自宅など）でインターネットにアクセスして、どこでも学習可能であることが、大きなメリットであると思われる。

これら2方式には、どちらが何に適しているのかについてもいまだ結論はでていない（萩原他，2004）。また、これら2方式どちらも遠隔講義として認識されている。今回の再履修クラスについては、同時に講義を受講することが困難である集団であることが前提のため、後者である非同期型遠隔講義を実施する。実施する内容はすべてWeb（インターネット上、HTMLで書かれた文書をブラウザで表示する方式ページ）とブログ（Webと同様インターネット上、HTMLで書かれた文書であるが、個人の日記のように順に記載していくことで簡単に更新して順に読むことが可能な方式ページ）によって学生に連絡し、指示にしたがって課題を遂行し、Web シラバス支援システムで提出していく方式をとっている。2007年度本学ではじめての試みであるため、今後の改善点も含めて検討するため、実際の講義内容と学生の履修成績結果およびアンケート調査について報告する。

方 法

講義科目：1年生必修科目「CP コミュニケーション I」として開講されている情報リテラシの科目を対象とした。1年生では情報リテラシと英語及び基礎ゼミ（導入教育的な内容）が

全学必修となっており、今回は情報リテラシ科目の再履修クラスを開講した。

講義対象学生：2年生から4年生の学生23名（2年生11名，3年生7名，4年生2名，卒延生2名，科目等履修生1名）で、「CP コミュニケーション I」の単位を未取得の学生であった。

講義内容：土曜の13時からの開講として教務の履修上は開講した。講義最初の1こまのみ、実際の履修方法や内容について以下の説明を実施した。

1. 遠隔講義で実施するため講義はインターネット上で開講し課題を提出すること。
2. メールの使い方について確認。
3. 具体的な講義内容について Web を使って説明し，課題の大まかな内容を説明。
4. 最初の講義を受講し課題をメールに添付して送付（メールアドレスの確認）。
5. Web ページのアクセス方法とブログのアクセス方法，および課題の提出方法を確認。特にブログについては ID とパスワードでアクセス制限をかけているため，アクセス方法についての確認が必要であった。

以上の説明の後2回目からは毎週金曜日に新しい課題や解説を記載するので指示に従って課題を提出して講義を受講していくことを確認した。さらに，メール送付可能であることの確認のため，メールを送付させ，その場で返信可能であるかも確認した。基本的には大学に在学中は大学のメールを積極的に利用させるため，大学のメールアドレスから送付することを条件とした。すべての個別連絡は，送付してきた大学のメールアドレスにメールを送付して行うこととした。

送付したメールにおける基本的な常識について，メールの書き方，署名の有無と作成方法についてチェックし，コメントをつけて返信を行った。4月の段階では Web シラバス支援システムによる課題提出が稼動していなかったため，課題はメールに添付して送付することを伝えた。メールの添付方法も同様に最初の講義で説明を行い，実際に1回目の課題であるワープロファイルを添付して送付させた。

毎週金曜にブログへ課題を書き込み，課題を遂行してメールに添付して提出させた。質問はブログでコメントすることまたはメールで質問を受け付け回答した。課題は，ワープロ課題3課題，表計算の課題1課題，コンピュータ入門を学習した課題5課題（小テスト）とまとめ試験60点以上取得で9つの課題提出と試験の合格点以上取得で単位を認定した。課題の説明はブログで指示し，PDF ファイルで具体的な内容の説明を読めるように記載した。説明を読んでも理解できない場合には，メールやコメントで学生から質問があり，個別に回答すると同時にブログに補足説明を記載することで，すべての学生に同じ対応が可能であるように実施した。実際に講義に用いた再履修クラスの Web ページを図1に示した。講義の Web ページは原則学内専用サイトとして運営されているため，学外からの連絡方法および毎週の細かな講義の内容を

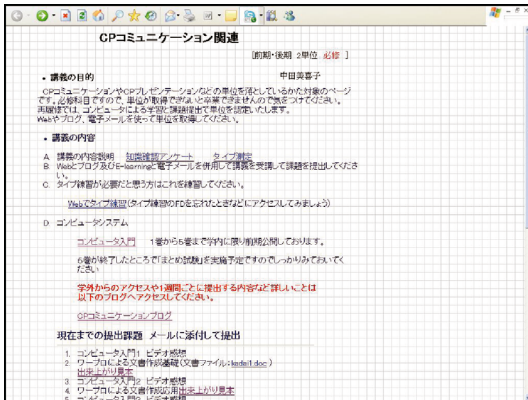


図1 講義のWebページ

記載する方法としてブログをプロバイダ上に開設した。履修者以外の者がみることを避けるため、ブログにはIDとパスワードを用いてアクセス制限をつけて開設した。アクセス制限があるため、学生は安心してブログに質問をコメントすることができた(図2)。特に、ブログのコメントに書き込んで質問することで、質問者以外の学生にも質問内容と回答を確認することが可能であった。さらに、文科省の遠隔講義の開講

条件にある、学生同士のコミュニケーションは、このブログによるコメントで互いに可能であった。

最終まとめ試験を実施し、その後大学のFDアンケート(通常は紙により実施し学生が回収して教務へ提出することで実施している)もWeb上で実施し、さらに今回の講義に対するアンケートも別途実施した。最終まとめ試験は、Web上で実施し、時間制限40分で選択肢から回答を選んで送信す



図2 講義のブログ

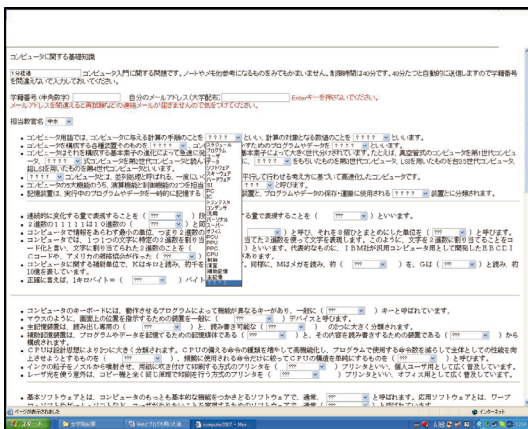


図3 Webによる試験

る方式であった(図3)。試験の実施アドレスはブログで連絡を行った。合否は、メールで個別に連絡し、不合格の学生には、大学の連絡用Web掲示板および個別メールで再試験の連絡を送付した。再試験を受験した学生には、受験終了後メールを送付してもらい、受信後できるだけ早く(24時間以内)合否を連絡した。60点以上で合格するまで試験を実施したが、2度目の再試験までにはすべての受験者が合格することが

可能であった。まとめ試験の内容は、小テストで毎週実施した確認テストで、コンピュータの概論とメールの常識であった。

5月21日提出課題から Web シラバス支援システムによる課題提出が可能となったため、課題の提出をシラバスシステムに切り替えた(図4)。メールによる提出では、個別に締め切りまでに送付してくるため、遅れても拒否するという事はなかった。シラバスシステムでは、提出期限を設定する必要があったため、必ず提出期限がくる



図4 本学シラバス支援システム
(シラバス提示ページ)

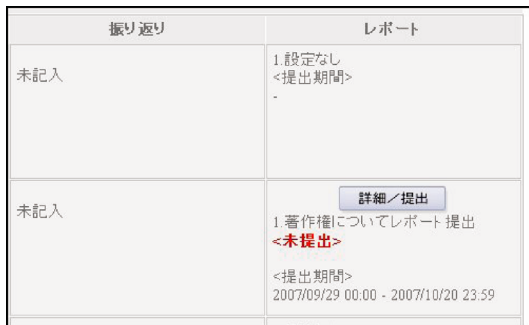


図5 本学シラバス支援システム
(課題 レポート 提出画面)

と提出不可能となるシステムであった。学生画面には、課題提出がされていない場合、科目のレポート提出の欄に赤字で「未提出」の記述がある(図5)。科目をアクセス表示させた場合も、横に「未提出」の赤字が表示されるため、未提出課題が存在することが明確に理解できる仕組みになっている。そのため、課題についての警告が与えられることとなり、課題提出の締め切りを促す形式になっている。

結 果

アンケートの結果を集計した。その結果、遠隔講義について抵抗がなく、遠隔講義について肯定的な意見に見受けられる。「遠隔地で講義をしてもらうことに抵抗がある」については思わない、やや思わないが78.6%であった。しかし、「身近に教員が接する方が勉強になる」についてはやや思うと思うで78.5%であった。さらに、「遠隔講義は無味乾燥でいやだ」は思うが64.3%となっている。しかし、最終の記述式アンケートによる結果では「都合の良いときに受講できてよかった」、「楽しかった」、「質問のメールで返事がもらえて意欲的に取り組めた」などが50%を超えた(表1)。さらに、再履修になった最大の理由である、出席日数について、「出席できないことが多くで単位がとれなかったので、遠隔講義でよかった」とした学生が86%

表1 アンケートの結果一覧

都合のよいときに受講できてよかった。	57%
楽しかった。	57%
質問のメールで返事がもらえて意欲的に取り組めた。	50%
すぐにその場で質問をすることができなくて、解決まで時間がかかった。	7%
出席できないことが多くて単位がとれなかったのが、遠隔講義でよかった。	86%

表2 課題提出頻度

課題提出頻度	
90-100%	59%
80%以上	18%
70%以上	5%
60%以上	0%
50%以上	5%
40%以上	0%
30%以上	0%
20%以上	9%
10%以上	5%
10%以下	0%

であった。実際に、このように回答をした学生はすべて試験に合格し、単位を認定することが可能であった。

次に、課題の提出頻度と単位取得の関係について、表2に示した。課題の提出頻度が70%以上の学生はすべて単位を取得した。それ以下の学生は単位を認定できなかった。彼らは、2回目から5回目の課題からの提出が未提出となり、課題を遂行できなく単位の認定ができなかったと思われる。

課題を提出していない学生には、個別にメールによる催促を頻繁に行っていたが、すでに2回目から未提出になっている学生からのメールは返信されることはなかった。

ま と め

今回の再履修クラスでは82%の学生が遠隔講義で単位を取得することができた。さらに、記述式の感想では、特に遠隔講義であったことによる受講のしやすさを述べているものが多い。このことから、個別指導が必要とされる再履修クラスにおける遠隔講義での開講方式は有効であったと思われる。開講した科目が必修科目である点も、学生の動機付けを高め、課題提出頻度をあげる要因となったと思われる。しかし、「都合の良いときに受講できる」という利点は、再履修クラスにおける時間割の物理的煩雑さを補完すると思われる。また、最後のアンケートの記述からも、「教員からの返信が遅れると不安になる」と記述しているものがあるため、学生からのメールやブログのコメントなどにおける返信は、できるだけ早く最低でも24時間以内に返信して回答することが必要であると思われる。

ただし、科目の質によっては遠隔講義に適さない科目もあることを認識した上での対応が必要である。さらには、開講する際の教材の作成について、大学からのサポートや情報管理部門からのサポートが不可欠であることが開講の条件であると思われる。今後、遠隔講義によるサ

ポートで学生をきめ細かく指導可能となることが期待される。

参 考 文 献

1. eラーニング白書 2005/2006年版, 経済産業省商務情報政策局情報処理振興課編, オーム社, 2005
2. 中田美喜子, 永田純一, 鋼 昌伸, 菅 秀樹 非同期型 e-Learning システム利用による学習効果 広島国際学院大学研究報告, 第38巻, 85-90 p, 2005
3. 永田純一, 中田美喜子, 中村格芳, 鋼 昌伸, 菅 秀樹 Bフレッツを利用した同期型 e-learning システムの運用 広島国際学院大学研究報告, 第37巻, p 91-98, 2004
4. 中田美喜子, 永田純一, 遠隔教育による単位互換科目 —ブログと e-learning を用いて—, 平成18年度情報教育研究集会 発表予稿集, Page 47-50, 2006
5. 萩原和晃, CHAMNONGKIJPHANICH T, 丹波次郎, e-learning の実用性について, 電子情報通信学会大会講演論文集, Vol. 2004, 情報・システム 1, Page. 187, 2004